

[研究ノート]

## 資料保存と現代物理学

藤 田 秀

1990年10月30日

藤田 秀様

日本物理学会  
会誌編集委員長

### 原稿御執筆の依頼

拝啓 いよいよご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて去る10月20日開催の会誌編集委員会で協議いたしました結果、右記の通り貴殿に原稿のご執筆をお願いすることになりました。ご多忙中とはなはだ恐縮ですが、ご承諾いただければ幸いです。もしお引き受けいただければ同封の「会誌投稿規定」を参照の上、御原稿を指定の期日までに下記宛お送り下さいますようお願い申し上げます。

なお、執筆いただいた御原稿には本会規定による原稿料を差し上げるようになっております。また、会誌に掲載された原稿の著作権は日本物理学会に帰属させていただきます。

お手数ながら同封の葉書にて諾否ならびに脱稿期日を御一報下さい。敬具

原稿送り先 105 東京都港区芝公園3-5-8  
機械振興会館 211号室  
日本物理学会 会誌編集委員長

---

## 日本物理学会 会誌原稿御執筆の依頼

欄 : 談話室

題名(仮): 現代物理と資料

執筆者: 藤田 秀 (中央学院大)

依頼主旨: 半導体物理など、比較的新しい現代物理学の分野でも、資料調査、資料保存の努力が必要な時期になっている。このような問題に対処するためには、物理学史の専門家だけでなく、広く各分野にわたる会員の関心を喚起する必要がある。この問題に関して、著者の最近の経験(半導体資料蒐集)に基づいて、広く一般会員の関心を喚起する観点から、著者の考え、提言などを書いて頂きたい。

長さ(厳守): 図, 表, 引用文献, 図の説明文すべてを含みます。

会誌原稿用紙 (17×22字) 12枚 (組み上がり 2頁)

脱稿期日: 11月30日 (ご無理でしたらご都合のよろしい期日をお知らせ下さい。)

郵送中紛失の恐れがありますので、原稿送付の際はコピーを一部お手元に置いて下さい。

---

## 資料保存と現代物理学

——物理学史の特異点——

藤田 秀 (中央学院大)

数ある物理学会の分科の中で、物理学史分科はあまり盛況とはいえない。物理学史とは年寄りの暇つぶし; 或いは想い出話を集めた程度のもの; そうであれば、第一線を引退した老人達の優雅な道楽仕事; と思っている人は多いよ

うだ。実はかく言う筆者も、初めはそう思っていた。私事で恐縮であるが、10年程以前に、それまで勤めていた研究所が突然閉鎖になった。幸いに縁あって、中央学院大学に勤めることになり、学長に面会した。その時、「ここでは物理の実験は出来ませんよ」と言われた。それで、すかさず、「いいです。これからは科学史でもやりますから」と答えたのを覚えている。また、もう随分昔の話になるが、物理学史の論文をジャーナルに投稿したことがある。すると、すったもんだの挙句の果てに、受理を断られた。つまり、物理学史の論文は、ジャーナルの編集方針とはなじまないというのである。こと程左様に、「物理学史」というのは日陰の子なのである。

何故、「物理学史」があまり流行らないかと考えてみると、その理由は2つあるように思える。まず第1に、物理学史で取り上げるテーマが、古典的なものが多いというところに、その原因の一半があるように思われる。もちろん、なにを研究テーマに選ぼうと、その人の自由である。しかし、人気が出るか否かということは、学問の自由とはまた別な問題である。そして人気をなげれば、予算はおりないようだ。従って人も集まらない。これは完全な悪循環である。

理由の第2は、世間の人は皆忙しくて、時間的にも気持の上でも、物理学史に参加するユトリがないためであろうと思われる。物理学史とは年寄りの暇つぶしであって、今のオレには、そんなものにかかわっている暇などない、というのであろう。

しかしながら、忙しくて他を顧みる暇がないということと、顧みなくてもいいということとは、別のことなのである。宇宙誕生の解明に迫る素粒子論の発展。ついに冷戦の終結にまで導いた半導体物理の進歩。20世紀末の物理学は、文明としての物理学から、文化としての物理学へと激しく変容しているのである。この変容を見逃していい理由はない。従って、物理学史が冷飯を喰っている理由の他の一半は、物理屋自身の側にも、その原因があると言えるであろう。

我国におけるこのような事情は、今に始まったことではない。それは自然科学を、「その『創造の源泉としての精神』には一顧だにくれず、もっぱらその『有用性』のみを手掛かりとして」<sup>(1)</sup> 追及してきた、我国の科学に対する独特な考え方に、その原因があると言えよう。「『有用性』の尺度で〈科学〉を評価しよう

というのは、一貫して日本人が近代科学にたいしてとり続けて来た態度である<sup>(2)</sup>

この『精神』が、「物理学史」に対する、世間一般の無関心の原因であると思える。つまり、「物理学史」の『有用性』がどこにも見出せないからである。『老子』の第11章にこんな言葉がある。「有のもって利をなすは、無のもって用をなせばなり」<sup>(3)</sup>。即ち、物理学史とは、もともとこのような「無用」の学問なのである。

このような境遇から、「物理学史」が自力で脱出するためには、どうしたらよいのか。それは、研究テーマとして「現代物理」を取り上げる事であろう。筆者は、国府田（隆夫）さんと雑談しているうちに、「我国における半導体研究」の軌跡を、記録しておきたいと思うようになった。現代はすべてのものが、物凄い早さで変化している時代である。今資料を集めておかなければ、すぐに散逸してしまって、何もかも判らなくなってしまうであろう。それで、一緒にインタビューの仕事をした<sup>(4)</sup>。1986年4月11日のことである。ほとんど同時に、アメリカでもトランジスター開発の記録を集め始めた。すると、たちまち大規模なインタビューが組織され、トランジスターを開発したベル研究所では、おびただしい数の手記が集められた<sup>(5)</sup>。要するに、たちまち抜かされてしまったのである。彼等の方が、「物理学史」の何たるかをよく知っていたのである。

一方、「現在」は時々刻々「過去」に食い込んでゆくのであるからして、現代物理学といえども、物理学史の研究テーマであり得る。そして、それが「歴史」の問題である以上、3つの重要なチェック・ポイントを避けて通ることはできない。それは；

- (1) 歴史家による資料の選択<sup>(6)</sup>
- (2) 素朴な「二元論」の放棄<sup>(7)</sup>
- (3) 「歴史は歴史家が作る」<sup>(8)(9)</sup>

というステートメントの容認

である。

第1の、「資料の選択」という問題は、「歴史」を語る以上避けて通ることはできない。即ち、与えられた（或いは得られた）資料が、すべて歴史的資料となる訳ではない。これは丁度、測定されたデータが、総て論文に載る訳ではない

のと同様である。データは選別され、ふるい分けられて歴史的資料となる。それらの資料を用いて、どのような「歴史」——即ち因果律——を発見しようとするか。これは全て歴史家の作業にまかされる。時々、この資料の「選択」を、何かアンフェアなことであるかのように思っている人がいるが、それは当たらない。すぐに判るように、このようにして組み立てられる「歴史」は、唯一つという訳ではない。全く同一の資料母集団を用いても、選択の規準が異なれば、異なった「歴史」が組み立てられる。しかしこれは、言いたい放題に、何を言ってもいいということではない。広く大勢の人に受け入れられるものでなければならぬことは、もちろんである。

第2の、「素朴な『二元論』の放棄」というのは、こうである。実験物理屋の99%の人は、観測する「主体」と、観測される「客体」とは、互いに全く独立に存在していると信じて疑わないであろう。そして「主体」による観測は、「客体」の状態を少しも乱さず、また観測精度を上げさえすれば、いくらでも真実の「客体」に迫れると考えているであろう。これを哲学では「二元論」という。<sup>(9)</sup>ところが、話が「歴史」のこととなるとそう簡単ではない。話を判りやすくするために、現代物理学史の問題から始めよう。現代物理学史においては、「主体」と「客体」とが分離できない。インタビューをし、手紙を書き、あるいはメモを書く「主体」は、同時に、時々刻々作られてゆく「歴史」の一部なのである。インタビューをすれば、インタビューをしたという「歴史」が残る。この意味で、現代物理学史は物理学史の特異点であると言えよう。

実はこの事情は、過去の事実をあつかっていても、変わりはないのである。手紙、手記、あるいは著作等全てについて、その時の「主体」の意志が入っている。「主体」の意志を離れた、「純粋に客観的で、確固不動な歴史」などというものは、いつの時代にあっても存在しないのである。

第3の、「歴史は歴史家を作る」というステートメントは、これまでの説明でもう大半は明らかとなったであろう。「主体」を離れた「客体」(=「歴史」)などというものは、存在しない。では「主体」の中の誰が「歴史」を作るのか。それは「歴史家」である。<sup>(9)</sup>だからこそ、「歴史は書き替えられる」のである。

では、現代物理学史の資料は、どのようにして集められ、保存されたいい

のか。それには、「現代」の中を生きて来られた、「生証人」の方々のインタビューを集めるのが、一つの有力な方法であると思われる。時々、書かれたものしか信用しないと言う人がある。それは、今日、「言葉の重み」が軽くなっている為に、言語不信症という病気にかかった病人である。約90分間のインタビューのもつ情報量は、膨大である。小さな「手記」などとは、較べものにならない。幸い、「我が国における半導体研究」に関しては、まだ可成り多くの「生証人」の方々がおられる。それらの方々にインタビューをお願いし、その記録を文字にする。それを持ち帰ってゆっくりと読み直して頂き、誤りや言い足りない所があれば、更に訂正して頂く。こうして半固定化された資料を、活字にして公開し、関心のある人達に配布する。大勢の人に見てもらい、広く知識と経験とを交換・収集するためである。もし誤りや記憶違い等が指摘されれば、更に適当な方のインタビューをお願いして、訂正を補足する。『我国における半導体研究の資料集』<sup>(4)</sup>について、一例を上げれば、植村(泰忠)先生は同冊子に詳細な書込みをして、送って下さった。これは、オリジナルに優る、貴重な資料である。これが生きた「資料保存」であると思う。こうして、人々の間の交流を深め、資料の精度が向上されたら、文献として整理・保存してゆくのがよからう。必要とあれば一か所に集め、ファイルに納め、ナンバーを打って、キャビネットの中に保存する。かくて、「資料」は「文献」となる。

いつの日か「現代物理学史」にも人手が増えれば、これらの作業は分業によって、能率よく行なわれるようになるであろう。即ち、インタビューの得意な人はインタビューに専念し、文献処理の好きな人はそれに専念する等である。一方、インタビューや手記に応じて下さった「生証人」の方々も、せいぜい旨い物を食べて、上味い酒でも召しあがって、なお必要とあれば追加のお話がかがえるように、長生きして下さることこそが、本当の「資料保存」であると信じてやまない。

#### 〈参照文献〉

- (1) 佐和隆光著『経済学とは何だろうか』岩波新書, p.129.
- (2) 同上, p.42.

- (3) 『中国の思想（第6巻）老子・列子』徳間書店，p.49.
  - (4) 藤田秀・国府田隆夫編『我国における半導体研究の資料集』中央学院大学総合科学研究所発行（残部少しあります）。
  - (5) 井上通子（コーニング・ジャパン）：私信。
  - (6) E. H.カー著，清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書，p.9.
  - (7) 藤田秀，中央学院大学総合科学研究所年報。（印刷中）
  - (8) 上掲(6) p.27.
  - (9) 藤田秀・佐藤進・齋藤慶典，中央学院大学総合科学研究所紀要。（印刷中）  
(1990年11月10日記)
- 

A 様

藤田・原稿は，全面的に書きなおして欲しいと思います。

特に冒頭の漫談調の文章は，物理学史の専門研究者を悪く刺激しそうに思います。

後者の，事実在即した記述を中心にもっと地道な考察をのべてもらいたいと考えます。

学会誌の基準を考えても，あまりくだけすぎた雑文は適当ではないでしょう。

1990.11.19

---

11/23

御丹精の原稿は，会誌にとって，有益なものと考えています（決して，身ビイキなどではなしに）。（以下略）

A

藤田 秀様

---



1990.12.1

藤田 秀様

B

前略 学会誌用原稿を、大変面白く拝見しました。私はこのように正直に、素直に語る文章が大好きです。人間が原点に帰って真に思うことは、時流の常識とは違っていても必ず正しいことが後世証明されると思います。この原稿が会員に広く読まれることを期待し、そのように取り扱いたいものと願っています。

一層の御活躍を祈ります。

草々

---

1991年 2月16日

藤田 秀様

日本物理学会誌編集委員長

前 略

この度は日本物理学会誌のために原稿をご執筆下さいましてありがとうございます。ありがとうございました。

さっそく閲読者（依頼原稿に閲読者というのは著者に対し失礼とは思いますが、読者に読み易くするためのアドバイザーと解釈して下さい）において読ませて頂きましたところ別記のコメントが寄せられました。ご検討下さいませようお願い申し上げます。

原稿のコピーをお送り申し上げますので目立つ色で修正の上、なるべく早めにご返送下さいませようお願い申し上げます。

草 々

---

タイトルと内容が遊離しています。

インタビューは重要な手段だと思いますが、それが科学史研究の重要な資料になるためには、徹底的な事前の準備、自由に語ってもらうことと必要最小限の誘導を行うことのバランス、歴史研究者によるあとのからの全面的クロスチェック、などが不可欠です。インタビューの情報量が手記の情報量より多いからといって、キャビネットにいれただけで、価値のある資料や文献になるわけではありません。

なぜ現代史なのか、なぜインタビューなのかについて著者の主張と説明が、読者に伝わりません。

掲載するためには、現代史研究にはインタビューという特別な方法がある、自分でそれをやってみた、その場合の注意すべき点はこうだ、という内容にしぼって全面的に書き直していただきたいと思います。

原文の自由なスタイルを保ったまま、上の意見を参考にして一層良いものとしていただくよう期待します。

---

B 様

前略 投稿原稿に対するコメント受け取りました。全くバカバカシイコメントばかりでオ話ニナリマセン。せっかくのお誘いでしたが、今度のことはなかったことにしましょう。寒さが続きますので、お元気にお過ごし下さい。

敬具

'91年 2月18日

藤田 秀

---

1991.3.2

藤田 秀様

B

ようやく春めいて参りました。

先日のお手紙を拝見しました。私はあの面白いお話が日の目を見ないのはとても残念です。A先生もきっと同じことでしょう。先生からは、うまくまとめるようにと言われていたのです。諸先生の御意見の中で尤もと思われる分をとり入れて書き加えるという形でゆっくりとお付き合いいただけないものでしょうか。

では御連絡をお待ちしています。

草々

---

藤田 秀様

1991年3月13日

拝復 編集委員会よりご執筆をお願いした談話室記事原稿についてのお手紙、拝見いたしました。寄稿を辞退したいというご意向を伺い、本日の編集委員会でその処置を検討いたしました。その結果に基づいて、とりあえず、以下のような編集委員会の考えと希望を申し述べさせていただくことと致しました。

各記事の著者にも執筆のご苦勞があるように、編集委員会にも会誌編集の規定に従って企画・編集を進める上で、少なからぬ苦勞があります。2月号の編集後記に書かれている著者と読者のトラブルも、最近増加しているそのような苦勞の一例です。依頼記事の原稿であっても、規定の手続きに従って編集委員会が選定した読者から意見が提出されれば、それが極めて不適切なものでない限り、それを著者にお伝えして考慮を求めることになっていることはご承知のとおりです。その際、著者が読者の意見をどのように考慮するかは、当

然、執筆者の自由に任されており、その内容如何にかかわらず無条件にそれに従わなければならないと編集委員会が考えているわけではありません。ただ、2月号の編集後記にも述べられているように、時によっては著者がかなり強く読者の意見に反発される場合があります。編集委員会としては、なるべくそうした対立的な関係が著者と読者の間に生じないように、両者の良識による建設的な協力関係を期待しています。このような場合、もしその必要があれば編集委員会では更に第三者の意見を求めるなどの努力を払うことにしています。このような意味で、最終的な段階に至るまでの過程は、執筆者のみならず、読者、編集委員会を含めた3者間の協同作業であることを、まず、ご理解頂きたいと思います。

今回の件についても、編集委員会が適当と判断して選んだ読者の意見を参考として、できるだけご考慮を頂きたいと希望しますが、もし、その内容に納得できない点があれば、第三者が理解できるような形でご意見を編集委員会にお寄せください。このような手続きは、執筆者にとっても編集委員会にとっても思わぬ労力と時間を伴うものですが、編集委員会としては、より良い会誌作りのために必要な過程として、それを厭わないつもりです。ご執筆者の立場としても、この点をご理解頂いて、ご協力をお願いできれば幸いです。

以上とりあえず 草々

日本物理学会誌 編集委員長

A

---

1991年 3月15日

日本物理学会誌  
編集委員長

A 様

藤 田 秀

要件：会誌への寄稿お断わりの件

本文：3月13日付けご通知拝見しました。

ひとに何と言われようと、

何と思われようと、

貴誌に寄稿する意志はありません。

[以上]

---

1991年 3月28日

藤 田 秀様

日本物理学会誌編集委員長

A

拝啓 ますますご清栄のことと拝察申し上げます。

この度は会誌談話室欄に「資料保存と現代物理学——物理学史の特異点」をご執筆頂きましたが、3月15日付で会誌への寄稿ご辞退のお手紙を拝受いたしました。編集委員会としては誠に残念でございますが、御原稿をお返し申し上げます。

敬具

---

1991年3月29日

日本物理学会誌  
編集委員長

A 様

藤田 秀

要件：会誌原稿受け取りの件

本文：

3月28日付けご通知と原稿受け取りました。  
お疲れさまでした。

[以上]

---

鼎談 無 題

福山，高松，藤田

一同：じゃ健康を祝して，乾杯！

福山：また1年たちましたね，早いもんですねえ……

高松：藤田さんにとって，今年はどんな年でした？

藤田：うん，いやな思い出のある年でしたね，まったく……

福山：何ですか，そりゃ？

藤田：物理学会とごたごたしたんですよ。原稿のコピーを送ったでしょう？

福山：ああ例の，「資料保存」とかいう？ 頂きました。

藤田：ええ，あれが気にいらんというわけですよ。

福山：あの原稿と物理学会と，どういう関係があるんです？

藤田：いやね，何か書いてくれというから，あれを書いて送ったわけですよ。

福山：はあ……

藤田：そしたら、それが気にいらんというわけです。

福山：でも、今のお話ですと、書いてくれと言って来たわけなんでしょう？

藤田：そりゃそうですがね。ありていに言えばね、「書かせてつかわすから、有り難く思え」というわけなんです。企業人と違って、大学の連中の集まりですからね。

高松：それで？ 藤田さんの原稿がリジェクトされた？ そりゃ面白そうだ！

藤田：僕もあと10年若けりゃ、チャンチャンバラバラやったでしょうけど、もうバカバカしくって……

福山：しかし、書いてくれと言っておいて、これはいかんとは、ずいぶん失敬ですね。

藤田：いや、福山さんが思っている程には、僕は「失敬だ」とは思ってないんだけど。ただ言うことがもうバカバカしくって……

福山：企業じゃちょっと考えられませんか。

藤田：うん。唐詩選の中にね、「且つは欲して分かつ、賢と愚と」というのがあるんです。世の中、バカとリコウとしかいないという意味なんです。しかし、バカはいつもバカで、リコウはいつもリコウならいいんですが、時として、バカがリコウになったり、リコウがバカになったりするからややこしい。

高松：ハハハ、そりゃそうだ！

福山：いわば「得意先」にこっちからお願いしておいて、それをまた断るなんて……そんなことが社長に知れたら、大目玉ですよ！

高松：その「得意先」が藤田さんだったら、もう黙っちゃいけないでしょうからね。

藤田：いやあ僕はね、近頃は、「温厚な藤田さん」ということになっているんです。

高松：ほんとですか？

福山：へエー、信じられませんか！

藤田：だからね、年を取るということは、いいことですよ。僕はね、ゆくゆくは「好々爺」になりたい……

高松：ワッハッハ、これはいい！（テーブルを叩く） 今日の酒はうまい！

福山：どんな所がいかんと言うんです？

藤田：うん、まずね、タイトルが気に食わない。タイトルなんてね、どうしよう  
とこっちの勝手じゃないですか。昔からね、「羊頭狗肉」と言って、羊の頭を  
かかげて犬の肉を売るといわけでしょう。

福山：キャッチフレーズということありますからね。

藤田：しかも、こっちは犬の肉だなんて思ってないんだから。

福山：論文のタイトルを、どうつけるかというのは、いつも難しい問題ですから  
ね。

藤田：いや、これは「論文」じゃない。「談話室」といってね、サロンのような  
欄です。僕に言わせりゃ、サロンのタイトルなんて、正確であるけどつまら  
なそうなタイトルをつけるか、不正確でもいいから面白そうなタイトルをつ  
けるか、どっちにするかといわれりゃ、面白そうな方を取りますね。これは、  
読者に対するサービスですよ。アカデミック・ワークじゃないんだから。

福山：具体的に、どういかんというんです？

藤田：「タイトルと内容が遊離しています」と来た。

福山：へえー。

藤田：これはね、僅か4488字の中で、何かしらまとまったことを言わなきゃなら  
ないんだから、誰だって遊離しますよ。これは言い掛りです。

高松：その物理学会の雑誌は、何部ぐらい出ているんです？

藤田：2万5千部ぐらいでしょう。現在の会員ナンバーが2万8千ぐらいだか  
ら、それから亡くなったり、やめたりした人を引くと、2万5千部ぐらいだ  
と思いますね。

高松：そりゃ凄い。それじゃ力んじゃうわけだ。

福山：しかし、言い掛りというのは、どうしてですか？

藤田：それはね、多分、人の言ってることの重要性が、全く判らなかつたんで  
すよ。「物理学史の特異点」というふうに、サブタイトルをつけてあるんですが、  
これに全く頭が回らなかつた。

福山：特異点というと、電磁気なんかのチャージのあるところ？

藤田：うん。今のばあいは、むしろ流体力学のほうがいいと思うんだけど、どん



どん涌きだしてくる「ソース」と、沈みこんでゆく「シンク」と……

福山：歴史にもソースとシンクがあるんですか？

藤田：ええ、そこが現代史の面白い所ですよ。歴史という和普通は過去のことでしょう。それもソースもシンクもない、一種の河の流れのようなものでしょ。しかも、干上がった河底みたいな所を調べてる。

福山：そんなもんですかね。

藤田：その上に、「物理学史」と来た日にゃ、「学問の展開を跡づけるのが、その仕事である」などと、浅薄なことを本気で言う人がいる。

高松：きびしい。

福山：でも、ソースというのは何ですか？

藤田：それは、時々刻々、「歴史的事実」が作られてゆくということですよ。会社だって、若い人が毎晩残業して、マニュアルをどんどん書いているでしょう。あれはみんな歴史になるんです。だから、どんな事があったかというだけじゃなくて、どのようにして歴史は作られて行くか、ということが学問の対象になり得る。

福山：なる程。するとシンクというのは、マニュアルを廃棄処分にするということですか？

藤田：いやいや、そんな生やさしいことでない。シンクというのは、人が死ぬということですよ。

福山：人が死ぬ？

藤田：そうですね、人は死ぬ。人が死ぬと、沢山の情報を持ったまま、あの世に行ってしまう。昔、E氏の書いた本に、「朝永先生にこの本を御覧いただくことのできないのが残念でならない」とあった。それを見た時、相変わらずペダンティックなことを言う奴だと思った。しかし一方では、「おれは、こういうハメにならないようにしましょう」と思った。これが、リコウも時にはバカになり、バカも時にはリコウになるという……

高松：会社の仕事を、そんなふうに見てましたか。いやこれは、田中社長にはとうてい判らない……

藤田：うん。田中さんには——何遍も話したけど——トックリ・セーターを着て

出社したら、とたんに叱られた。

高松：うん、聞いた聞いた。

藤田：社長室に來いと言ってるというから行ってみたら、今日は奥の方に引っ込んでいて、明日からはスーツを着てこいという。何故か？ と言ったら、「お客さんが皆んなスーツを着て來るんだから、その格好では失礼だ」と言った。

高松：そうでしょう！

藤田：その上、「まだまだ貴方には、改めてもらいたい事が沢山ある」と言われた。

高松：なる程！

藤田：しかし、頭の中の事を、とやかく言われては耐まるもんかと思った。

高松：藤田さんも田中さんも、随分苦労しましたね！

藤田：うん。黒田君の紹介だから、仕方なく採ったけど、とんでもない奴が來たと思ったでしょう。居なくなってセイセイした筈です。

福山：その他には、どんなことを言って來たんですか？

藤田：そりゃもうゴマンとありますよ。僕に言わせりゃ、これはもう、いちいち付きあってゆくべきものじゃなくて、要するに、お前の原稿はボツだという無責任なステートメントの言い替えです。

福山：と言いますと？

藤田：やれ「主張と説明が読者に伝わりません」とか、「掲載するためには……内容をしばって……」とか、「もっと地道な考察を」とか、「学会誌の基準を考えて……雑文は適当でない……」とか、やれ「全面的に書きなおして……」とか、どれ一つ取って見たって、やりだせば泥仕合になるものばかりです。

福山：そんなことを言うんですか！ 随分ひどいもんですね。大学の先生なんて、もっとおだやかな紳士ばかりだと思ってました。

藤田：どういたしまして！ 皆んな自分が一番偉いと思ってますからね。宇宙の中心は自分だという、天動説なんですよ。

福山：天動説ですか。

藤田：「我思ウ、故ニナンジアリ」ですからね。もちろん紳士も沢山いますけど、

そういう人は学会の委員などになりやしません。

福山：そうですか。

藤田：昔、学会誌に短文を書いたことがあるんだけど、或る人に、「よくあんなものを書く気になったなア」と言われました。全くその通りですよ。最初から断ればよかった。

高松：でも藤田さん、横浜に居た頃より生き生きしてますよ。大学という水が合ってるんじゃないですか？

藤田：うん。でも NEC 横浜工場は懐かしいなあ。ナッパ服着て、お揃いのサンダルはいてね……

福山：羨ましいですよ。何かもう一つ取りますか？

高松：じゃ僕は厚揚げ。

福山：私はニシンの塩焼き。

藤田：僕はつくねにしよう。

[以下略]

(1991年12月17日記)